

山梨県立文学館 館報

1989(平成元)年
11月 創刊

第110号



「俳句の後山 諸若葉潜りて後山高からず」
高橋睦郎 2

「飯田龍太展 生誕100年」
展示資料より
閲覧室より・寄贈資料より 3

4

5

館からのご案内
やまなし文学賞結果・
「資料と研究」第二十五輯目次
開館三十周年記念事業報告
館の日誌 利用のご案内
8 7 6

特設展 「飯田龍太展 生誕100年」 開催

会期 2020(令和2)年4月25日(土)～6月21日(日)

昭和二十年代から平成初めにかけて活躍した俳人飯田龍太(一九二〇～二〇〇七)は、笛吹市境川町に俳人・飯田蛇笏の四男として生まれた。三人の兄を戦争と病で失うと、郷里に定住の意志を固め、蛇笏が主宰する俳誌「雲母」の編集に従事した。一九五四(昭和二十九)年八月、第一句集『百戸の谿』を刊行、「第二芸術論」「社会性俳句」の議論に湧く戦後俳壇に伝統派の旗手として登場した。

一九六二年十月に蛇笏が亡くなると「雲母」の主宰を継承し、全国各地の句会に出席する一方、鑑賞・評論・随筆へと活動を広げていった。



境川の自宅(山廬)にて 1985年11月
提供 角川文化振興財団
(撮影 斉藤勝久)

通信俳句講座の監修や新聞の投稿欄の選なども担当し、俳句を詠みかつ味わう楽しさ、俳句を通して日常生活を豊かにしていくよるこびを、平明な言葉で幅広い世代に語りかけた。俳句人口がかつてないほど増大し、俳壇の第一線に立った龍太は、最後の句集となった『遅速』を刊行した翌年の一九九二(平成四)年に、「雲母」を八月発行の九〇〇号で終刊とする決意を述べ、社会的に大きな話題となった。以後、十五年間、龍太は俳句を発表することなく二〇〇七年二月、八十六歳の生涯を終えた。

当館では、二〇〇八年春に初の企画展「飯田龍太展」を開催、翌二〇〇九年度には、常設展に「飯田蛇笏・飯田龍太記念室」を設置し、紹介を行ってきた。

本展では、館蔵の自筆資料を中心に紹介、生誕百年にあたり、改めて飯田龍太の俳句や随筆の魅力を見つめ直していく。

○シンポジウム
「飯田龍太を語る」
5月31日(日) 午後1時30分～

会場 講堂 定員500名(要申込)
進行 井上康明(俳人・「郭公」主宰)
パネリスト 瀧澤和治(俳人・「今」代表)
中西夕紀(俳人・「都市」主宰)
高柳克弘(俳人・「鷹」編集長)

○講演会「普段着の龍太」
5月16日(土) 午後1時30分～
会場 研修室 定員150名(要申込)
講師 飯田秀實(龍太長男・山廬文化振興会理事長)

○大人のための初心者俳句ワークショップ
5月23日(土) 午後1時30分～
会場 研修室 定員30名(要申込)
講師 保坂敏子(俳人・「今」編集人)

○文学講座(年間文学講座3)
「山廬を訪れた人々」
6月14日(日) 午後2時～3時10分
会場 研修室 定員150名(要申込)
講師 保坂雅子(当館学芸課長)

※シンポジウム、講演会、文学講座はお電話か当館受付、ホームページからお申込ください。
ワークショップの申込は、往復葉書の「往信」の文面に①郵便番号②住所③氏名とふりがな④電話番号を記入し、〒400-0065甲府市貫川1-5 35山梨県立文学館教育普及担当までお送りください。なお、「返信」の宛名面に郵便番号、住所、氏名も記入してください。

※新型コロナウイルスの感染拡大の状況によ

岩月家資料を受贈

太平洋戦争が激しくなった一九四四(昭和十九)年、井伏鱒二が家族とともに疎開したのが西山梨郡甲運村(現・甲府市和戸町)の岩月家だった。甲府の妻の実家に疎開をしていた太宰治も、たびたび井伏の滞在する岩月家を訪問し、親交を深めた。

このたび岩月宏史氏より井伏鱒二書簡、太宰治原稿など二八三点の資料が寄贈された。この内、太宰治「あとがき」原稿は、『パンドラの匣』の再版を、宏史氏の伯父岩月英男が創業した双英書房より刊行する際、書き下ろしたものの。

このほか、英男の弟・菊男が収集した森鷗外、夏目漱石、萩原朔太郎などの初版本も多数受贈した。

「新収蔵品展 作家のエピソード」(三月二十二日まで)で一部を公開している。



太宰治『パンドラの匣』
双英書房版
「あとがき」原稿(部分)

俳句の後山

諸君潜りて後山高からず

高橋睦郎

令和元年五月三十一日、小澤實主宰率いる澤俳句会の山廬行に、とくにお願いで同行した。私はかつて龍太さん健在の頃、二度ほど山廬を訪ねている。一度

目は平成二年四月十二日、岩波書店新書編集部企画で飯田龍太を含む八人の俳人（飯田のほかは年齢順に三橋敏雄、安井浩司、高橋睦郎、坪内稔典、小澤實、田中裕明、岸本尚毅）が、飯田邸である山廬と御坂峠天下茶屋と二日ばかりの句会を催すべく、まずは第一日目の山廬に集まったのだ。

二日間の句会の詳細は小林恭二著・岩波新書『俳句という遊び―句会の空間―』に記録されているとおりだが、山廬でもてなしの描写はない。いや、「飯田家は古い家である。／ただ古いだけではない。／その間、きちんと手を入れられ、またしかるべく愛されたゆえである、一種端正な艶やかさでもいいたい

ような風情をたたえている。」その空間に通されたことが、まずもてなしなのだ。

もちろん第一日の句会の後には、裏の竹林とれとれの筍の煮もの、蒟蒻の刺し身、池に飼われていたのを汲み上げての鯉こくなどのご馳走がふるまわれたことが、第二日目の自由題の投句の内容からわかる。いずれも甲州ならではの飯田家ならではの、実のあるご馳走、龍太夫人丹精の料理だ。ちなみに二日目「選句の前に」「昼食」が出て「山梨名物、鮎と黍飯」だったと、これははっきり記録されている。

二度目の山廬訪問は一度目の何年後だったろうか、やはり春の甲州の旅に若い友人を誘って、その午後、予告もなしに山廬に電話すると龍太さんは在宅で、いらっしやいと云われて友人ともどもご馳走に与った。一度目と違って突然の

しかも飯田家には縁もゆかりもない友人を伴ったの闖入だったせいにか、出された酒にしたたか酔って辞去。失礼してしまつたとの苦い思いが残っている、澤俳句会に紛れこんでの二十数年ぶりの訪問だったわけだ。

二十数年前の失礼を詫びるといつても、詫びる相手の龍太さんも龍太夫人もすでにない。しかし、子息の秀實さんと多恵子夫人に迎えられ、夫人に主人はあなたと会えるのをたいそうたのしみにしてましたのと言われて、急に胸の悶えが下りた思いがした。身心ともにくつろいで、秀實さんの案内のまにまに前庭から裏へ、そして裏山、いわゆる後山へ登った。

後山へは一回目の訪問の折にも登ったはずだが、記憶はない。制限時間内に席題句をつくらなければならぬ緊張感から風景の細部は消し飛んでしまったのだろう。改めて登ってみると、上りきるのに五分とはかからなかったのが意外だった。後山はもちろん山廬からの位置関係による命名で、命名はおそらく蛇笏によるものだろう。私の見落としてなければ、昭和七年四十七歳で世に問う

た第一句集『山廬集』に後山の語はない。五年後十二年刊の第二句集『靈芝』の巻末近くに「山廬孟蘭盆一句」として「中盆や後山の雲に人行かず」とあるのが初出ではあるまいか。

それから後続句集に出たり出なかつたり、それが没後四年、四十一年に龍太により刊行された遺句集『椿花集』にはどつと出る。思うに加齢により蛇笏の行動範囲が狭くなったことにより生涯通して親しんだ後山への思いが煮詰まってきたのだろう。対する龍太の句にはあからさまな後山の語は出ないのではないか。「手が見えて父が落葉の山歩く」という「落葉の山」はおそらく後山、後山といわず単に「山」というのが父蛇笏に泥まなない龍太流なのだろう。

後の日を生きる私たちにとっては後山は山廬の後山であるとともに、俳諧の、俳句の後山、それが思いのほか高くなかつたのは、先人としての蛇笏の、龍太の私たちに對する慈悲のようにも思われる。土地としての山廬裏の傾斜地が後山であると同時に、俳人蛇笏が、龍太が、私たちの後山なのだ。

(詩人)

展示資料より

特設展「飯田龍太展 生誕100年」

「水澄みて四方よもにせきある甲斐の国」軸装

個人蔵



小さな流れも澄み切って感じられる秋を背景に、周囲を高い山々に囲まれ、護られてきた甲斐の国の風土への思いが詠まれている。

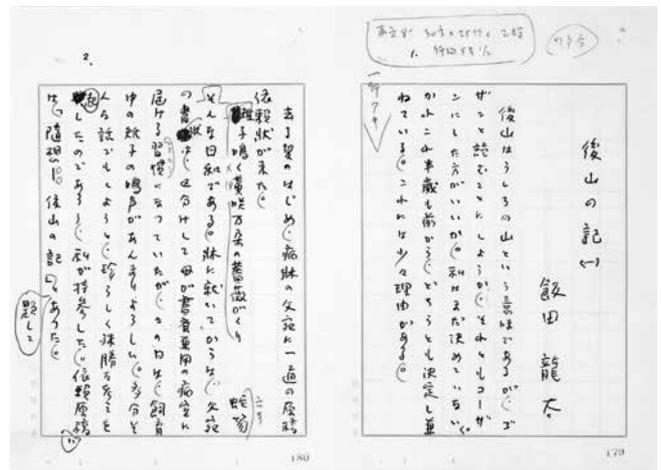
二〇一四(平成二十六)年十一月十一日、この筆墨が刻まれた飯田龍太文学碑が、当館のある芸術の森公園内に建てられた。

「後山の記」原稿 館蔵

「俳句」一九六三(昭和三十八)年二月号から四月号まで計三回連載。蛇笏が亡くなった翌年の執筆。後に冒頭の一部を削除して、第一随想集『無数の目』(一九七二年十一月角川書店)に収録。

蛇笏と龍太は、境川の自宅「山廬」の裏山を、「後山」(ゴザン又はコーザン)と呼んだ。本作では、新婚の頃の両親の逸話、村の猟師留とよさんと蛇笏との交流などが語られ、亡父を追慕する心情が見える。

龍太は、三十代から随筆を発表しており、その素材は日常身辺の話題、自然の描写から、旅行記、俳壇内外の文学者との交友録など幅広い。俳句鑑賞文や評論も含め、その散文については、高い評価を得ている。



本展では、このほか、「旅歳時記」原稿や「中村汀女の句」原稿などを展示し、龍太の散文の魅力を紹介する。

金子兜太 飯田龍太宛葉書

一九七八(昭和五十三)年一月七日

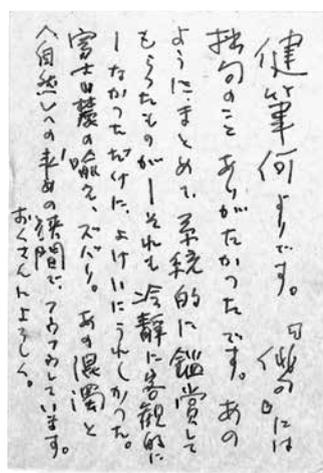
寄託資料

龍太は「俳句」一九七七年十二月号と翌年の一月号に「金子兜太の四季」(上)(下)を連載。一月号掲載の末尾では、「金子兜太全句集」(一九七五年六月立風書房)収録の未完新句集『狡童』について、多くの死者が眠る富士北西麓の「青木ヶ

原樹海を思い浮べる」一方で、作品によっては「行く手に明らかな道を見出したようなうれしい気分になる」と批評している。この葉書は、これに対する礼状で、「あのように、まとめて、系統的に鑑賞してもらったものが―それも冷静に客観的に―なかつただけに、よけいにうれしかった」と謝意を伝えている。

金子兜太(一九一九〜二〇一八)は、龍太歿後の「俳句」二〇〇七年五月号の追悼文「座談会のことなど」の中で、龍太を「本物の、それこそ体で自然そのものと取組んでいる」数少ない俳人の一人と評した。この原稿とともに、二〇〇七年三月八日、「朝日新聞」に掲載された「高潔な句風、突然の俳壇引退の謎」の原稿など、戦後の俳壇を牽引した二人の交流を示す資料を展示する。

(学芸課 保坂雅子)



閲覧室より

今年度の閲覧室あれこれ

早くも三月、今年度がまもなく終わろうとしています。この一年間、閲覧室へご来室くださりまして、ありがとうございます。今回は、閲覧室の一年を振り返ってみたいと思います。

今年度は新元号の発表とともに始まりました。その発表を受けて、資料紹介「山梨の文学者と万葉集」を行いました。概要は館報一〇八号で紹介しています。

平成から令和となった二〇一九年は、当館が三十周年を迎えた年で、さまざまな事業を展開しました。特設展・企画展と関連した閲覧室資料紹介「太宰治を読む」「山と水に遊ぶ」「宮沢賢治の世界」は、「三十周年記念」を冠して実施しました。百冊前後の図書・雑誌を、展覧会とあわせてお楽しみいただきました。「山と水に遊ぶ」の詳細は、前号の館報をご覧ください。「宮沢賢治の世界」では、宮沢賢治の著作とともに、配置した猫のオブジェによる雰囲気作りが好評でした。

三十周年記念事業の本因坊戦第二局を開催した五月には、「囲碁と作家」と

題した資料紹介を行いました。図書・雑誌二十点から、川端康成の「名人」や、坂口安吾の「文人囲碁会」といった作品のほか、囲碁を愛好した文学者たちによる文壇本因坊戦の記事などをご覧ください。

六月に行った資料紹介「文学者の食卓」では、檀一雄のエッセイ『わが百味真髓』や、全国の菓子を俳句と文で紹介した中村汀女の『ふるさとの菓子』など、文学者の食にまつわる作品三十四点を味わっていただきました。こちらは、アイメッセをメイン会場として開催された「第十四回食育推進全国大会 in やまなし」の関連イベントとして行ったものです。

館内のエントランスホールにクリスマスツリーが飾られた十二月には、「クリスマスのお話」をテーマに、少女雑誌「ひまわり」や児童文学雑誌「おとぎの世界」掲載のクリスマスの物語や表紙絵、絵本、太宰治「メリイクリスマス」などの小説・エッセイを集め、閲覧室内にコーナーを設けました。

また、山梨県出身・ゆかりの文学者を紹介する「文学者の誕生日にちなんだ資料紹介」では、六人の文学者を取り上げました。四月に俳人「飯田蛇笏」、九月に児童文学作家「徳永寿美子」、十月に芥川賞作家「八木義徳」、十一月に俳人「石原

八束」、二月に小説家「檀一雄」で、誕生日前後に三週間、それぞれ代表作など約三十冊をご紹介しました。

最後の資料紹介は「探偵小説の時代」で、大正から昭和前期の探偵小説作品や雑誌などを手に取って見ていただきました。

年二回の「書庫見学」では、普段はお入りいただけない書庫をご案内しました。第一回は六月八日、第二回は十一月二十日の県民の日に開催し、合計八十名の方がご参加くださいました。一定の温度・湿度に保たれた書庫の環境を体感していただくとともに、保管する図書や雑誌の中から、芥川龍之介の『三つの寶』(たから)や樋口一葉のデビュー作掲載雑誌「武蔵野」など、何点かを取り上げて解説しました。参加者の方々は、興味深く見てくださっていました。

この他、閲覧室の大きな出来事として、機器の不調で長い間ご不便をおかけしていましたが、マイクロフィルムやマイクロファイブシユの利用に、新しいマイクロリーダー機を導入しました。ぜひご利用いただければと思います。

新年度も、当館の資料に親しんでいただけるよう取り組んでいきます。ご来館の際には、閲覧室にお立ち寄りくださ

(資料情報課 小林幸代)

「寄贈資料より」

(令和元年八月〜令和二年一月)

○岩月宏史氏より太宰治「あとがき」原稿ほか特殊資料十九点、図書二六三点、雑誌一点。

○岩月万千子氏より井伏鱒二「あの山を見よ」色紙ほか二点。

○佐野秀延氏より「早川の谷」風土絵図ほか特殊資料三点、図書二点、雑誌三点。

○上野巖氏より上野巖撮影「暗雲の夜明け」薬師ヶ嶽からの富士」写真パネル。

○飯村寿美子氏より田中冬二筆「故園の菜」折帳ほか特殊資料四点、雑誌七点。

○石井耕氏より「祖国の砂」日本無名詩集」を跡付ける」第三・四回抜き刷り。

○渡辺清貴氏より井伏鱒二「まことによるし」軸装。

○手嶋尚子氏より飯田龍太「山寒し」短冊ほか特殊資料三十三点、図書二十一点。

○秋山正統氏より秋山秋紅蓼「青柿」画短冊ほか八十二点。

○前田良和氏より深沢七郎「檀山節考」出版記念会切り抜きコピーほか三点。

館からのご案内

※新型コロナウイルスの感染拡大の状況により、各催しを延期(または中止)する場合があります。

■教育普及事業

※各企画・講座とも参加・受講無料

○年間文学講座(定員500名)

・講座1「古典文学(再)入門」
今年度は「古典文学(再)入門」を共通テーマに開催します。都留文科大学の先生方5名によるリレー式講座です。

講師 長瀬由美(都留文科大学教授)

第一回、第二回担当

5月29日(金)『枕草子』入門

6月26日(金)『源氏物語』入門

・講座2「作家たちの一癖ある名作」
幻想を描く、現実を描く

講師 大木志門(山梨大学大学院総合研究部教育学域人間科学系准教授)

5月9日(土)「夏目漱石『琴のそら音』」幻想作家時代の漱石

6月13日(土)「泉鏡花『外科室』」愛と生と死と

・いずれも午後2時～ 会場 講堂

※お電話か当館受付、ホームページからお申し込みください。

○名作映画鑑賞会(定員500名)

・午後1時30分～ 会場 講堂

※申込不要。定員を超えた場合、入場をお断りする場合があります。

※年間文学講座、名作映画鑑賞会の年間予定は、チラシまたは4月以降の当館ホームページをご覧ください。

○初心者短歌教室(定員20名)

講師 三枝浩樹

(歌人・山梨県歌人協会会長)

6月7日(日) 午後1時30分

6月20日(土) 午後1時30分

※要申込。往復葉書の「往信」の文面に

①郵便番号②住所③氏名・ふりがな④

電話番号を明記し、〒400-0065甲府市貢

川1-5-35山梨県立文学館学芸課

教育普及担当までお送りください。な

お、「返信」の宛名面に郵便番号、住

所、氏名も記入してください。申込必

切5月8日(金) 必着

○読書会

基本的に毎月第1あるいは第2日曜

日の午前十時から開催。

5月10日(日) 森鷗外「雁」

6月7日(日) 太宰治「地図」

※読書会の年間予定はチラシまたは4

月以降の当館ホームページをご参照

ください。お電話か葉書(氏名・電話

番号を明記)でお申し込みください。

■展示室

常設展

○第1～4室(展示室A)の展示替え

各コーナーの展示替えと共に第一室

で「山梨の文学碑」をテーマに、期間

限定の資料展示を次のとおり行いま

す。

・春の常設展

3月10日(火)～6月7日(日)

山梨の文学碑1 山崎方代

「ふるさとの右左口郵は骨壺の底にゆ

られて吾が帰る村」甲府市右左口町

・夏の常設展

6月9日(火)～8月23日(日)

山梨の文学碑2 芥川龍之介

「藤の花軒端の苔の老いにけり」

北杜市長坂町・清光寺

○第5室(展示室B)の展示替え

山梨県出身・ゆかりの文学者104人

を2期に分けて展示。

・小説・評論・随筆・翻訳・ジャーナリ

ズム・戯曲・脚本・童話・童謡

4月25日(土)～8月30日(日)

・詩・短歌・俳句・川柳・漢詩

10月3日(土)～2021年3月7

日(日)

※第5室は3月10日(火)～4月24

日(金)は休室します。

■閲覧室(入場無料)

○閲覧室資料紹介

・「探偵小説の時代」～4月5日(日)

・「飯田龍太の世界」

4月25日(土)～6月21日(日)

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

・「土橋治重」(4月25日生まれ)

4月17日(金)～5月8日(金)

○書庫見学

6月6日(土)

①午前11時～ ②午後2時～

○増田実氏より増田実画「ログアウト」
第四回挿絵原画。

○伊藤仁氏より伊藤仁画「息子」挿絵原
画二十三点。

次の皆様からも図書・雑誌等をご寄贈
いただきました。(敬称略)

相澤 邦衛 出井 寛

雨宮 更間 中沢 玉恵

井越 芳子 中島 礼子

一條 宣好 二ノ宮 一雄

一瀬 公弘 秦 恒平

大橋 毅彦 林 充美

岡本 勝人 平松 伴子

鍵和田 柚子 堀内 万寿夫

風間 克巳 堀内 容子

片山 由美子 松本 徹

勝又 浩 水上 孤城

黒澤 あき緒 水木 亮

黒沢 忍 村田 三枝子

小山 弘明 森 義真

最光 蝕 守屋 明俊

佐々木 孝夫 山本 育夫

沢口 芙美 山本 つばみ

滝谷 泰星

この他に団体の方々からも寄贈いた
だいております。

樋口一葉記念
第二十八回
やまなし文学賞結果

一、応募状況

本文学賞は、山梨県と深いゆかりを持つ樋口一葉の生誕百二十年を記念して、山梨県の文学振興と、日本の文化発展を図る目的をもって、平成四年に制定された。今回も小説募集と研究・評論の推薦を受ける二部門で実施した。選考委員は小説部門が坂上弘・佐伯一麦・長野まゆみ、研究・評論部門は、中島国彦・関川夏央・兵藤裕己の各氏。
小説部門の応募作品数は309編。うち男性は227編、女性は80編。山梨県内からは27編だった。
研究・評論部門の推薦延数は115編。うち自薦が14編(単行本11冊 雑誌掲載3編)、他薦が101編(すべて単行本)だった。

二、選考結果

選考会は、研究・評論部門を二月七日、小説部門を二月十三日に東京都内の學士會館でそれぞれ行い、受賞作を決定した。選考結果の発表を、二月二十八日に行った。

小説部門のやまなし文学賞には副賞として、百万円、同佳作二編には各三十万円、研究・評論部門のやまなし文学賞二編には各五十万円が贈られる。

また、小説部門の三編は山梨日日新聞

紙上及び同紙電子版に掲載、やまなし文学賞「梵字碑にザリガニ」は単行本として刊行する。

◆受賞作品◆

小説部門

□やまなし文学賞

・「梵字碑にザリガニ」

崎浜 慎 (沖繩県在住)

「受賞の言葉」

大江健三郎が、「世界規模の暴力」と「個人にやどる暴力」をつなげて考えた、と書いている。それは、創作する上での私のだいそれた目標でもある。「暴力」に限定する必要はないが、個人とそれを取り巻く社会を切り離してものを書くことはできないのではないかと、思っている。そんなことを考えるのは、米軍基地を抱える沖繩が、政治社会の潮流をもろに受けているのだとまざまざ感じずにはいられない場であるからだろう。戦後七十五年になるいまも、沖繩県民は米軍による暴力に絶え間なくさらされ、生活を脅かされている。そんな沖繩という「狭い」地域を描きつつ、それが広い世界へとつながっていくような作品をいつか書きたいと思う。

と、理想を述べながら、今回の作品は、ある家族のあくまでも私的な事柄をテーマにしたものである。沖繩が置かれている状況を直に描くことはできなかったが、そこにふだん生活する人間の姿が少しでも伝われば、という願いも込めている。

受賞は喜ばしいことであり、励みになり、今後も書き続けていきたいという気持ちを新たにしたい。選考委員、事務局など関係者のみなさまには心より感謝申し上げます。

□やまなし文学賞佳作

・「鷹を飼う」

松本昂幸 (東京都在住)

・「スーパームーン」

和泉真矢子 (兵庫県在住)

研究評論部門

□やまなし文学賞

・服部徹也 (大谷大学文学部任期制助教)

・「はじまりの漱石 『文学論』と初期創作の生成」(二〇一九年九月 新曜社)

(主な編著)

共著に西田谷洋(編)『文学研究から現代日本の批評を考える——批評・小説・ポップカルチャーをめぐる』(二〇一七 ひつじ書房)、小平麻衣子(編)『文芸雑誌『若草』——私たちは文芸を愛好している』(二〇一八 翰林書房)、坪井秀人(編)『戦後日本文化再考』(二〇一九 三人社)。

・河野龍也(実践女子大学文学部国文学科 教授)

・「佐藤春夫と大正日本の感性——『物語』を超えて」(二〇一九年三月 鼎書房)

受賞は喜ばしいことであり、励みになり、今後も書き続けていきたいという気持ちを新たにしたい。選考委員、事務局など関係者のみなさまには心より感謝申し上げます。

(主な編著)

・河野龍也編『佐藤春夫読本』(二〇一五 勉誠出版)

・井原あや・梅澤亜由美・大木志門・大原祐治・尾形大・小澤純・河野龍也・小林洋介編『私』から考える文学史——私小説という視座』(二〇一八 勉誠出版)

■「資料と研究」第二十五輯目次

A5判一五六頁・三月下旬発行

・我らのペムベルとネリはいつたいたいとこまで行けるだろうか 栗原 敦

・講演録「宮沢賢治への問い」 赤坂憲雄

・宮沢賢治の短歌を読む 三枝昂之

・講演録「対談 太宰治・著書と資料をめぐる」 安藤 宏
川島幸希

・飯田蛇笏 高室呉龍宛書簡翻刻 高室有子
一九三二(昭和七)年

・井伏鱒二 野上昭代宛書簡翻刻 中野和子

・佐佐木茂索日記「且樂軒記」 参翻刻 保坂雅子

・中村星湖作成スクラップブック②⑤ その八

外川豊子・小林幸代・中島桂子

開館三十周年記念事業報告

開館三十周年を迎えた二〇一九(平成三十一・令和元)年は一月からの新収蔵品展「手書きのリズム」を皮切りとして、一年を通じて様々な記念事業を行った。

三月二日(土)、三枝昂之館長と県立美術館の青柳正規館長とのスペシャル館長トーク(美術館講堂)は、美術館開館四十周年(二〇一八年度)と文学館開館三十周年(二〇一九年度)をあわせての記念企画。芸術の森公園内に隣接する両館の館長が、美術と文学のゆたかな交流について語り合った。年度が改まった四月から本格的な事業を開始、文学を知り、広く日本文化に親しむ場を提供する催しを通じ、文学館の魅力を発信した。

「そのことばのつづきへ」

文学館の新たな魅力の発信として、キャッチコピー「そのことばのつづきへ」を、四月二十七日(土)、三枝館長が研修室において発表した。同日、外壁に懸垂幕を掲げ、館のイラストをあしらったオリジナルブックカバー(二万枚)の配布を始めた。県内の書籍組合を通じて各書店での利用を依頼したほか、県内各図書館、博物館施設、館内の

ミュージアムショップで利用者へ配布した。キャッチコピー発表とあわせ、短歌の上の句「あのときの出会いがあつて今がある」(五・七・五)に続く下の句(七・七)を八月三十一日まで募集。応募された全作品三、〇六一点(一般三〇二点、小中高校二、七五九点)を掲載した冊子を十一月十日に発行し、応募者に配布すると共に、ホームページに掲載し、二階ロビーにパネル掲示を行った。(十二月二十四日まで)

■囲碁の本因坊戦開催

五月二十二日(水)、二十三日(木)

囲碁の第七十四期本因坊戦第二局を芸術の森公園内の素心菴において開催。関連事業として、二十二日は、「短歌・俳句創作と合同合評会」を開催。県内の歌人七人・俳人八人が午前中、初手観戦をした後、公園内を散策、文学館の展示観覧をして作品を創作。午後、美術館講堂において三枝館長司会により一般公開の形で合評会を行った。このほか、文学館研修室におけるプロ棋士による指導碁(二十二日)、講堂における棋士と館長のトークと大盤解説会(二十三日)を実施。常設展では「囲碁と文学」コーナーを設けて川端康成書簡などを展示

(四月二十三日〜六月二日)し、閲覧室では囲碁を愛好した作家の作品に関する図書・逐次刊行物を紹介する「囲碁と作家」コーナー(五月十五日〜六月五日)を設けた。

■開館三十周年記念式典

九月二十日(金)

関係者・来賓を招き、研修室において記念式典を開催。文学館協議会会長を長く務められた数野強氏、三十年間協力員として奉仕活動に尽力した九名の方々へ館長から感謝状を贈呈、三十年の歩みを画像で振り返った。この内容は記念冊子にまとめ出席者へ配布した。式典終了後引き続き、企画展「宮沢賢治展」のオープニングセレモニーを行った。

■文学講演会

林真理子「小説の力を信じて」

十一月十日(日)

本県出身の作家林真理子氏を講師に迎え、講堂で開催。改元にちなむ様々な行事の体験や、「西郷どん!」を始めとする歴史小説執筆にあたっての苦心、これからの仕事のことなど、多彩な話題にふれ、満員の会場を終始魅了した。

■年間通じての記念展示の展開

【常設展】「近代文学の名作」コーナーを設けて、春は樋口一葉「たけくらべ」に「ごりえ」、夏は芥川龍之介「或阿呆の一生」、秋は山本周五郎「青べか物語」おごそかな湯き、冬は深沢七郎「檜山節考」「笛吹川」を取り上げ、それぞれ館蔵の原稿・草稿を展示した。

【閲覧室資料紹介】「映像になった文学作品」(二月〜四月)、「太宰治を読む」(四月〜六月)、「山と水に遊ぶ」(七月〜八月)「宮沢賢治の世界」(九月〜十一月)をテーマに館蔵図書・逐次刊行物の展示を行った。

【特設展・企画展】

新収蔵品展「手書きのリズム」

一月二十六日(土)

〜三月二十四日(日)

特設展「太宰治 生誕110年―作家をめぐる物語―」

四月二十七日(土)

〜六月二十三日(日)

特設展「山と水の文学」

七月十三日(土)

〜八月二十五日(日)

企画展「宮沢賢治展 ようこそイーハトーブの世界へ」

九月二十一日(土)

〜十一月二十四日(日)

館の日誌

- 9・13(金)年間文学講座1「富士山を詠む和歌—中世—」
講師 佐藤明浩(都留文科大学教授)
閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介
「徳永寿美子」(~10・3)
- 9・18(水)出前授業(北杜市高根放課後子ども教室)
- 9・19(木)年間文学講座2「林芙美子『放浪記』—女性と労働と詩—」講師 大木志門(山梨大学准教授)
- 9・20(金)企画展「宮沢賢治展 ようこそイーハトーブの世界へ」レセプション
閲覧室資料紹介「宮沢賢治の世界」(~11・24)
- 9・21(土)企画展「宮沢賢治展 ようこそイーハトーブの世界へ」(~11・24)
企画展関連講演会「カムパネルラのスケッチ帖」
講師 長野まゆみ(作家)
- 9・23(月・祝)名作映画鑑賞会「風の又三郎」
茶室「素心菴」にて呈茶
- 9・28(土)企画展関連講座「資料が語る宮沢賢治—展示のみどころ」講師 中野和子(当館学芸員)
- 10・2(水)出前授業(北杜市長坂放課後子ども教室)
- 10・3(木)飯田蛇笏・龍太碑前祭
- 10・4(金)年間文学講座1「近世文学に見る富士山」
講師 加藤敦子(都留文科大学教授)
- 10・5(土)企画展関連講演会「宮沢賢治への問い」
講師 赤坂憲雄(民俗学者・学習院大学教授)
- 10・6(日)茶室「素心菴」にて呈茶
- 10・10(木)教師のための学習会
- 10・13(日)第6回読書会
- 10・14(月・祝)名作映画鑑賞会「蒲田行進曲」
- 10・16(水)秋の常設展 期間限定公開 近代文学の名作5
山本周五郎「おごそかな湯き」(~12・1)
- 10・17(木)年間文学講座2「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』—児童文学か宗教文学か—」
講師 大木志門(山梨大学准教授)
- 10・18(金)閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介
「八木義徳」(~11・7)
- 11・1(金)年間文学講座1「富士山と江戸時代の旅」
講師 加藤敦子(都留文科大学教授)
- 11・3(日)企画展関連 講演と演奏「賢治作品の奏でる音楽」
講師 宮澤和樹(林風舎代表取締役)朗読・ピアノ演奏 宮澤やよい ヴァイオリン演奏 宮澤香帆
- 11・9(土)名作映画鑑賞会「砂の器」
- 11・10(日)開館30周年記念講演会「小説の力を信じて」
講師 林真理子(作家)
第7回読書会
- 11・15(金)閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介
「石原八束」(~12・5)
- 11・16(土)企画展関連対談・文学創作教室「宮沢賢治 短歌・俳句の世界」
講師 石寒太(俳人)・今野寿美(歌人)
進行 三枝昂之(当館館長・歌人)
- 11・20(水)書庫見学
茶室「素心菴」にて呈茶
- 11・21(木)年間文学講座2「芥川龍之介『歯車』—遺作の中の幻想—」講師 大木志門(山梨大学准教授)
- 11・23(土)企画展関連講演会「宮沢賢治の文学的表現行為—〈本統に一切を肯定する〉ために—」
講師 栗原敦(実践女子大学名誉教授)
- 12・3(火)冬の常設展 期間限定公開 近代文学の名作6
深沢七郎「榊山節考」(~1・26)
- 12・8(日)第8回読書会
- 12・14(土)朗読公演会「オペラ タング—まほうをかけられた舌—」うたのステージ
出演 オペラシアターこんにゃく座
- 12・19(木)年間文学講座2「谷崎潤一郎『春琴抄』—フィクションと事実の間—」
講師 大木志門(山梨大学准教授)
- 12・21(土)文学創作教室「三枝浩樹短歌教室」
- 1・5(日)茶室「素心菴」にて呈茶
- 1・10(金)年間文学講座1「中国の靈山」
講師 寺門日出男(都留文科大学教授)
- 1・11(土)第10回新春小学生百人一首教室
- 1・12(日)第9回読書会
- 1・25(土)「新収蔵品展 作家のエピソード」(~3・22)
- 1・28(火)冬の常設展 期間限定公開 近代文学の名作7
深沢七郎「笛吹川」(~3・8)
- 1・31(金)閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介
「檀一雄」(~2・20)
- 2・7(金)閲覧室資料紹介「探偵小説の時代」(~4・5)
- 2・9(日)第10回読書会

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9:00~17:00(入室は16:30まで)
- 閲覧室・研究室 9:00~19:00(土・日・祝日~18:00)
- 講堂・研修室 9:00~21:00
- 茶室 9:00~21:00(準備・片付けの時間も含まれます)
- ミュージアムショップ 9:30~16:20

■休館日等(3月~6月)

- 3月2・9・16・23・30日 ○4月6・13・20日
- 5月7・11・18・25日 ○6月1・8・15・22・29日

■常設展示室観覧料

一般330円(260円) 大学生220円(170円)

()内は20人以上の団体料金

高校生以下の児童・生徒、65歳以上、障害者手帳をご持参の方、およびその介護をされる方は無料です。

■施設利用のお申し込みについて

- 講堂・研修室・研究室・茶室の申し込みは、使用する日の6ヶ月前から原則として10日前までです。
- ☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申し込みの際、ご説明いたします。

■新型コロナウイルス感染拡大予防のための施設利用の変更について(3月3日現在)

- 3月20日までの期間、次のとおりとします。
展示室・閲覧室・研究室・ミュージアムショップ:休止
講堂・研修室・茶室:通常通り ※各イベント等の延期・中止は主催者にご確認下さい。
- 3月21日以降の予定については、当館ホームページ等でお知らせいたします。

山梨県立文学館 館報 第110号
令和2年3月10日発行

編集兼
発行人 三枝昂之

発行所 山梨県立文学館

〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35

☎055(235)8080 FAX 055(226)9032

<https://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>
※紙面・記事・写真等の無断転載・転用はお断りします。